

景観と風景の概念構成に関する試論

Thoughts on the Conceptual Framework of Landscape and Scenery

窪田 陽一*

Yoichi KUBOTA

This paper gives preliminary trial thoughts to discuss a hypothetical framework on landscape issues in order to provide fundamentals for ameliorating landscape where people look at and live in. The author tries to exploit cross-disciplinary or transversal approach to outline a conceptual framework for understanding landscape and scenery as phenomena in several different phases. Etymological reviews on salient ideas are compiled from historical discussions before proposing a new keyword, “landscape-scenerial corollary”, as an integrated concept to contemplate the structure of landscape as phenomenon and scenerial view as event.

Keywords: 景観, 風景, 景観-風景系, 志向性, 様相, 現象

1. 緒言

平成 18 年に全面施行された景観法では, 中心的な用語である景観そのものの定義は明確にはなされておらず, 建築基準法等の他の法律とは組み立てが異なっている。これは, 今でも議論があるように, 景観という二文字で表される概念の内包と外延が, 風景に与えられるそれらと重なり合うために解釈が錯綜し, これらの言葉を使う人毎に想定する定義に揺らぎがあつて一点に定まらないという事実から生じた事態である。一方, 景観とは別に風景を別途定義して論考を進める研究も増えつつある。

本論考は, 人間を取り巻く環境を人間の視覚を通じてとらえる時に使われる景観と風景の概念に関して, 両者及び周辺の概念を包括的に内包するような概念を提起する前段として, 各用語が使われてきた歴史的経緯を整理し, 概念構成を確認することを試みた試論である。

*埼玉大学大学院 理工学研究科 環境科学・社会基盤部門／工学部 環境共生学科

Department of Environmental Science, Faculty of Engineering, Saitama University, 255 Shimo-Okubo, Sakura-ku, Saitama, Saitama, 338-8570, Japan

(原稿受付日: 平成 25 年 7 月 31 日)

景観と風景, そして類似する表記の言葉(景相, 景域, 山水, 眺望, 眺め, 光景等及びこれらに対応すると考えられる外国語の単語)の定義は, 多様に表現されてきた。そのような思惟の対象となる現象としての景観と風景等の類似の概念の異同を問う既往研究も数多くある一方, 本質的な比較衡量をせずに語感の違い等の感覚的な反応により日常言語のレベルで曖昧さを伴いながら使い分ける例も少なくはない。景観と風景を識別し個別に定義しようと試みる論考もあるが, 景観及び風景を包括的に論じるための基盤的な概念構成の議論はここ十数年程の間に始まったばかりである。語源的な考察や分野横断的な再定義の議論を展開する一助としてこの試論を上梓する。

2. 景観と風景の由来

2.1 景観及び風景を意味する欧州諸語の系譜

景観という日本語の表記は, 明治・大正・昭和初期に活躍した植物社会学者の三好學(1862-1939)が留学先のドイツで学んだドイツ語の *Landschaft* の和訳に当たったことに始まる, と地理学者の辻村太郎(1890-1983)が主著『景観地理学講話』(1937)で指摘して広まった。なぜこの対応関係になったのか, 語源的に確認できる範囲で景観と風景

の異同を考量し、欧州言語と日本語の異同を確認する。

ラテン語系以外の欧州諸語で同一の表記がされる land は「人の手によって拓かれた大地」を意味し、ドイツ語では語尾に英語の ship に当たる接尾辞 schaft を伴って Landschaft が「土地であること」「土地の様子」の意味を得たと考えられている。「土地の景観化」とも呼べるこの関係は、低地ドイツ語に属するオランダ語でも同様で、語尾に接尾辞 schap を付した landschap が「土地であること」、換言すれば「人間が関与し形成した場所の様子」を意味する。Land は単なる地表ではなく、人間が何らかの作為をなした、地上のある範囲(extent/tract)であり、手つかずの自然は land ではないとかつては考えられていた。

一方ドイツの隣国オランダでは、ルネサンス期に見出された透視画法に基づく絵画の影響を受けて16世紀から17世紀にオランダ風景画という絵画史に残る一派が生まれ、人口比で見ても画家が多い国となり、どの家にも必ず風景画が壁に掛けられているという状態だった。P・ブリュエル(Pieter Bruegel de Oude : 1525-1530 頃-1569) らが描いた風景画には、人々が自らの手で作り上げた干拓地や丘陵の農場の姿、即ち土地の様子が、そこで生き生きと働く人々の姿も含めて風景画として描かれている。それは神話や伝説に基づいて構成された想像上の場面ではなく、現実の、それも多くは郊外や農村地帯を描いた絵画だった。天然の大地を豊穡な土地に変える労力への賛美がその根底にある。オランダ語の landschap(複数形は landschappen)は、画家に絵画の制作を依頼する時の契約書に書かれた業務内容の表現で、landschap が風景画を意味する用法として定着した証左と考えられている。

そのオランダとの交流と共にイギリスにオランダ風景画が伝来し、5 世紀頃以来の英語の古語 landskip が landschap に対応する言葉として復活し使われるようになったという説がある。また、landskip の異表記形 landship がオランダ語の landschap に発音が近いこと、landscape という言葉に変化し、15 世紀以降に広まったという説もある。16 世紀末には英語の語彙として定着したとみなされ、1598 年に刊行された英語辞典 OED (Oxford English Dictionary)に収録されたという説(Hoskins:1955) が受け入れられている。さらに、landship から転じたとする説の一つに、ship には shape 即ち「形

「形態」を含意する用法があったため、その変化形とされる landscape は「土地の眺め」即ち「目で見た土地の形態」を始めから含意していたとする説もある。

総括的に言えば、landscape は、人間と関わりがある範囲の土地に何らかの意図により形成された眼前にある環境を、身近な世界として視覚を通してとらえる、即ち目を向けて見るという観点が込められていることになる。それ故に、目の前に広がる眺めそのものをモチーフ(題材)とする風景画をも意味に含む言葉となった。

その後、産業革命期にあった18世紀のイギリスで、J・コンスタブル(John Constable:1776-1837)や J.M.W.ターナー(Joseph Mallord William Turner:1775-1851)に代表される英国風景画と呼ばれる絵画史上重要な一派が生まれ、英国では18世紀から19世紀にピクチャレスク(picturesque: 絵画的)と呼ばれる、風景画を典範とする眺めが実際に眼前に見られるように庭園や郊外の土地を造形する環境改造思想及び造園技法の誕生につながった。造園家 H・レプトン(Humphry Repton:1752-1818)や Capability Brown の異名を得た L・ブラウン(Lancelot Brown:1716-1783)らは、欧州大陸で独自の造園文化を確立したイタリアやフランスの幾何学的な空間に対抗して、「自然は直線を嫌う(Nature abhors straight line)」等の言辞を標榜し、風景式庭園(landscape garden)または英国式風景庭園(English landscape garden)を様式として確立するに至る。言い換えれば、絵画と共に英語に持ち込まれた時から、オランダ語の landschap に由来する landscape つまり風景画と呼ばれる絵画は、身の回りの世界を見る特定の方法(理解の様式あるいは鑑賞の規範)となった。そして、絵画の題材、主題、手法として採用され、描かれることが多い眺めが実際に風景として見られる地方や田舎の土地の広がり全体として意味する用法を得た。landscape 及び scenery が共に集合的に景観及び風景を意味するとともに風景画をも意味するようになった背景がここにある。北欧のスウェーデンには landskap と表記される、古い政治的区分に由来する地理上の分類をそのまま地名に残している区域があり、地域空間の広がりを含む用法の証左と言える。

風景画を通じての風景の発見、その事象の体験の基底となるように形成された景観の発見や創出は、英国にとどまらず、新興国カナダでも1920年代に一世を風靡した

7 人の風景画家集団, グループ・オブ・セブン(Group of Seven)が現れ, 国民にカナダの風景価値に目を向けさせた。風景として感受する自然の眺めを絵画に定着させる見方は, 産業革命に伴う人々の行動範囲や交流圏の拡大, それに対抗する自然主義と共にドイツ浪漫派やフランス印象派の流れを生み, 明治の日本に及ぶに至った。

2.2 景観と風景の併存状況

景観という漢字の表記は, 先述の通り三好学によりドイツ語の *Landschaft* の翻訳語として登場した。三好が書いた書籍は百冊に上るとされているが, 景観を表題に含む書籍は『植物生態美観』(富山房:1902), 『日本植物景観 第 1-15 集』(丸善:1905-1914)等が挙げられる。現代の景観生態学に相当する植物社会学の分野であり, 景観を体験する人間は研究対象に含まれない。後に地理学者の飯本信之(1895-1989)や造園学者の井出久登が提起した景域も *Landschaft* の概念の広域性に着目した表現である。風景は見る者の内面に生起する情緒的な反応を含むため, 個々人の主観性を排除した概念として景観の方が科学的思考にふさわしいとする立場が優勢だったためであろう。

これに先立つ 1876(明治 8)年, 絵画や彫刻の技術教育を目的に工部省工学寮内に日本最初の官立美術学校である工部美術学校を創立するため, 工部卿の伊藤博文が画学(絵画), 造家(建築), 彫刻の 3 部門を担当する教師各 1 名をイタリアから招聘したい旨の具申を太政大臣の三条実美卿にした。この時, 絵画部門の教育内容の風景画を意味する用語として地景という表現を伊藤博文が建議書に使ったことが確認されている。招聘するイタリア人が使うイタリア語では風景画は *pittura paesaggistica*, 風景は *paesaggio* だが, 伊藤は馴染みのある英語の *landscape* の *land* を地に, *scape* を景に置き換えたかに見える。その経緯は定かではないが, 少なくとも日本画や水墨画に描かれる山水とは異なる眺めを描く西洋画, それも風景画を想定したことは明らかである。オランダやイギリスの風景画とは全く異なる, 山水や風景の伝統文化を持つ日本では, 地景の意味が伝わり難かったのか, この言葉は一般に使われるには至らなかった。

1894(明治 27)年に『日本風景論』を上梓した志賀重昂は, 別の書物では山水を使い, 『世界山水図説』(富山房:

1911), 『続世界山水図説』(富山房:1916)と題する, 世界各地の景色を紹介した紀行文を著した。志賀の『日本風景論』に関しては, 国粋主義思想との関連等種々の研究がなされているが, 西欧的な科学知識, 特に地理学や地形学, 植物学や気象学等の知見を駆使して日本の特徴的な場所の眺めを抽出し, 後の国立公園等の自然風景地の指定に至る流れを生んだ点が評価されることが多い。志賀の意図は, 風景文化の生成基盤としての日本の景観の物象的な特徴を, 欧米科学の近代的認識の方法論に基づいて説明が可能であることの検証を試みたことにあったという解釈が多いが, 志賀が景観を使わずに風景や山水を使ったことは, その後の景観と風景の意味の解釈の多様性をもたらす遠因でもあったとも言えよう。

一方, 中国から伝来した南画の影響は日本の山水画に波及し, 絵画に描かれた山水から実景あるいは真景としての現実の風景へと視線(意識)を転じる, 文学的情調を現実の眺めに求める情緒的, 情動的な志向性(emotional/affective intention)を含む感性を育てた。旅に出て, かつて歌人らが風景の様相を詩文に詠った実在する場所を訪れ, 過去に生成された風景が実体験された場所で, 先人の胸中に去来したと推測される感興を自らも得ようと想像力を高めて追体験を試みる人々がいる。このことを志賀が考慮したかは明らかではないが, 景観を越えて風景を軸にまちづくりを考えようとする現代の傾向の中では, これらの点を理解した上で各概念を再定義する必要がある。

2.3 景と観の来歴

それでは, 明治期まで景観という言葉は日本になかったのだろうか。なぜ景と観が結びついて景観の表記に至ったのかを考える手がかりとして, 仏教文化圏及び漢字文化圏における景と観の用法の来歴に着目する。

神奈川県高座郡寒川町一之宮に景観寺という天台宗の古刹がある。山号を窪田山, 院号を宝珠院という。山号に筆者の名字がある理由は不明だが, 寺の由来は行基による開基とされ, 江戸時代の重要な文献『新編相模国風土記稿』によれば 757(天平宝字元)年に創建されたと伝えられている。本堂の棟札に残る年代によると, 1536(天文 5)年頃に寺容が整ったと推定され, 内部は 1683(天和 3)年の再建時の状態を遺しているという。これらの年代が

ら考えて、遅くとも 16 世紀にはこの地に寺が存在したことは事実だが、寺の名称に景観の文字を使うようになった時期は文献が無く不明である。もし行基による 8 世紀の開基の時から景観寺と命名されていたとすれば、景観という表記の最古の例である可能性が高い。

景の文字は、景品や景物、景気、景況、景仰、景行、景色、景勝、景福等の用法があるように、「高尚である」「仰ぐ」「めでたい」(音が慶と通じる)を意味し、「寿ぐ(ことほぐ)」「めでたい」「褒める」と言い換えることができる。影響の影の文字の左辺に景がある通り、影の文字は、光に伴って生成される影が見えることで奥行きを伴う立体的な視覚像が得られる様子を表している。

また、ネストリウス派という古代キリスト教系の一宗派が唐の太宗の時代に中国に伝えられた時、これを景教と呼んだという記録があり、「光の宗教」「神々の光を崇敬する一派」を意味するものだった。

一方の観は、観音、観世音等と略される観世音菩薩の行いとして「世の中を観る」「世の中の声(=音)を聞き届ける」という意味に連なっている。梵語の Avalokiteśvara の和訳である観世音菩薩は、世人の音声を観じ、衆生が抱える苦悩から救済する菩薩とされ、人々の姿に応じて大慈悲を行うことから、千変万化の相に顕現するとされる。その姿は六観音や三十三観音等の彫像や絵画に表されることが多い。達観が「広く大局的な見通しを持って遠い将来の情勢を見通すこと。目先の事や細かな事に迷わされずに真理や道理を悟ること。俗事を超越して悟りの境地で物事に臨むこと。」と定義されるように、観は超越的な視点から「理解する」「認識する」ことである。この解釈は、現代における景観の定義としても妥当する。観想(一心に思いを凝らす)や観照(本質を見極める)も志向性を持って世界を観ることである。景観が風景よりも客観性を含み、風景は主観性を含む、という見方が多いという状況も理解できる。

また、『易経』にある「国の光を観る。用て王に賓たるに利し」の一節から「国の光(=景)を観る」ために旅をする行為を観光と呼ぶようになったとされている。

三好が Landschaft の和訳を景観とした背景にこれらの観点が関わるか否かは不明だが、可能性の一つではある。

3. 景観と風景の再定義

3.1 土地の景観化

高速で移動できる便利な交通機関が全くない時代でも、景観や風景という概念を知らずとも、世界の一部を眼前に受け止めながら人類は生きてきた。地球の表面の一部が、そこに立つ人間の視覚を通じて景観になる時、すなわち環境の景観化は、視覚像としての環境の眺めであり、人間が環境の中で視覚系を通じて脳内に透視形態として視知覚する現象である点では通時的にも普遍的なものである。景観の形成と景観の体験は表裏一体の関係にあり、眺めを通じて土地を景観として理解するという行為は、人間による意識的、意図的な環境への関与あるいは介入に関係する。そのような行為を成しうる人間に、結果として生じる環境の状態への志向的な眼差しが欠けていれば、風景が生成される基盤自体が欠如するという事態が生まれることは避け難い。地形や植生分布等の自然的基盤を意図的に改変する開発行為は、結果の是非を問わず景観形成(formation of landscape)に他ならない。

3.2 現象としての景観

景観及び風景の定義は、両者の境界が曖昧であるが故に過剰包摂の状態にある。景観と風景は同じものだとする安直な極論もあるが、以下では現象として景観を、事象として風景をとらえる見方を試みる。

ギリシャ語に由来する現象の概念は、科学的な学術研究の中枢をなす用語であり、その外延として個別の事象がある。個々の事象も現象に包摂される。現象は人間が感覚器官を通じて知覚できる全ての物事を意味する包括的な概念であり、自然界や人間界に何らかの形をとって現れる事柄を、錯覚や作為も含めて意味する用語である。事実や真実であるかではなく、どのような形姿で立ち現れるかが問われる。人間が視知覚できる環境の形姿として定義される現象としての景観は、人が環境の中に立ち、感覚器官を通じて直接的あるいは間接的に脳内で対面する、身体の周囲を取り巻く環境の形相であり、自ら立つ場所を取り巻く環境の様相を人間が視知覚しようとする時、環境が景観として認識される。人間がそこにいなければ景観は現象として生起しない。

この状況を踏まえ、景観を「人間が関与して形成された土地に関して視覚現象体験を通じて蓄積的に形成される認識の諸相」として包括的に定義する。それは、現象としての景観の実体験を通じて形成される認識あるいは知としての景観である。眼前の環境を、個々の眺め(single view/scene)という視覚的景観(visual landscape)を手掛かりとしながら、相同性(homology)または同質性(homogeneity)が高い眺めが得られる範囲の土地を意味する、landscapeの原義とも言える地域的景観(regional/areal landscape)に集約されていく過程的な機構を想定できる。個別の事象である眼前の眺めは、風景となる可能性を含みながら、次々に時間軸に沿って継起的な現象体験の連続体として選択的に蓄積され、その総体として地域的景観(regional landscape)として統合的に認識されることになる。

これは欧州景観会議(ELC=European Landscape Convention)の考え方でもある。ELCによる定義に準じて、景観体験の中の最初の段階である視覚を通じて得られる、通常は眺望(prospect)や眺め(view)と呼ばれる視覚的景観(visual landscape)を狭義の景観とし、その経験的蓄積(cumulative experience)による総合的な景観像を広義の景観として地域的景観と位置付けるものである。日本の景観アセスメントを解説した文献では、視覚的景観と地域的景観に眺望景観と圍繞景観を対応させている。

3.3 事象としての風景

近年の日本国内では、景観に代えて風景を意図的に使う論考が増えている。それらの考察では景観と風景の定義を個別にしていることが多く、両者の相互関係は論者により曖昧な場合があった。そのため今世紀に入り、景観と風景の関係を包括的に定義しようとする試みが内外の研究者によりなされている。例えばオランダの Maarten Jacobs は、matterscape と mindscape という造語を新たに定義し、matterscape の状態からどのように mindscape が生成されるかに着目して景観が風景となる時の変移の諸相を論じている。中村良夫(2002)や若松司による考察(2004)においても、景観化そして風景化という現象が生起する機構を想定し、両者を統合的に説明しようとする提案がされている。その検証は容易ではないが、眼前に見える現象としての景観が、ある条件下で風景として立ち現れ

る事象を、人間と環境の間に生起する現象体験の中で包括的にとらえることは可能であると考えられる。

景観との異同が問われる風景の風は、風流、風光等、感性に関わる儚い(ephemeral)、大気の流れを思わせる移ろいゆく側面が伴う。そうであれば、風景は景観の様相の変化に対する感受性(sensitivity)と共に生成される事象となる。個別事象としての風景は、原理的には全ての人々にとって個人的なものだが、体験内容に共通性が高い場合は集合的表象としての風景となり、人々に感性的に共有されるものとなりうる。それはまちづくりや風景の再生を目指す景観修復に際して共通認識の基盤をもたらす。このように風景を情緒的志向性を含む事象(event)としてとらえることは、それが生成される場所と結びつき、景観の中から誘発的に生成されると考えることに連なる。

3.4 景観の様相と風景化

景観の様相(modality)に変化が現れ、ある特定の様相に対して受容者の反応に情緒性が誘発される時、そこは風景を感得する場へと転移する可能性がある。環境の物理的状态が恒常的でも、異なる風景が生まれる可能性はある。事象の状態を必然性や可能性等の判断の確実性に基づいてとらえる様相は、景観の外観(appearance)や相貌(physiognomy)の特殊な状態として考える。受容者の体験の中で景観が風景の様相を呈するようになる状態を相転移(phase transition/modal shift)として解釈し、景観の風景化、風景の生成をとらえる考え方である。

人々の間で風景の共通感覚的な側面が共有され、社会的な意味が伝わる表象として言語化され、風景文化の共有基盤になれば、眼前の眺めの情緒的意味を社会的な共有財産として取り戻す契機につながりうる。

人々が見る夕焼けの景色は、各人の脳内に生成される個別の事象としての風景を生成する。見る方向や角度、注視する範囲も異なっても多くの人々は共通に夕焼けを見たと感じ、それが数日前のもので互いの記憶内容を比較することができないにも関わらず、共通の体験をしたと思い、記憶像となった夕焼けの心象(image)を共有していると共通感覚(common sense)として受容する。主観的な体験であるにもかかわらず共通認識として受け入れることは、風景の集団的表象化という間主観性の基底を成す。

3.4 景観-風景系の概念構成

景観として現象を体験するか、風景としてその場でその時に生起する事象を体験するか、を日常において眺める人自身が意識することは少ない。景観として見るか、風景として見るか、を規定する要因を明確に挙げることも難題である。景観を蓋然的に眺めている時もあれば、風景の中に一体感を持って溶け込んでいる状況もありうる。その場から動かずにいる時、風景から景観へいつの間にか回帰していることもありうるかもしれない。景観が突如風景の様相を呈し、情感を高めることもありうる。このような流動的な現象として景観と風景の関係を措定することは、場所の景観にどのような様相の変化を生み出せば風景の再生につながるかを考える契機となりうる。

景観の風景化は、認知心理学でいうアウェアネス(awareness)すなわち自らの意識がある方向に向けられている状態の自覚的認識である。見ている自分がそこにいるという自覚は、間主観的なアウェアネス(intersubjective awareness)をもたらすと考えられる。同一の(厳密には近接した)場所で、同一の時刻にある方向に目を向けて得られる眺めを見た時に、同じような情緒的反応が複数の見る者(viewer)の間で生じている状況を、共感的間主観性(Compassionate intersubjectivity)と呼んでおく。

このような現象として生起する景観と風景を包括的にとらえるための概念として景観-風景系を提起する。系は、systemではなく、数学的概念の corollary をあて、景観-風景系の英訳を landscape-scenerial corollary としておく。Corollary は数学用語で「必然的に付随(随伴)する事象群」等の意味を持つ。随伴性や付随性という概念は、現前に見える景観が何らかの様相の変化により風景として生起する現象の、相転移に関係すると考えられる。

では景観が形成されていなければ風景は生成されないだろうか。人間が地球上の地表のある一点に立って、周囲の環境を眺める状態は、日常の人間の意識レベルとしては、志向性が高まっている、言わば励起状態である。景観を風景として眺めることができるか否かは、景観を構成する諸要素が何らかの情緒的意味(affective meaning)を持つ様相を伴って見える状況が生起するか否かによる。景観が風景として対話的に相転移する状況、換言すれば

景観の様相が情緒的反応を生成する時に風景として体験される過程はどのような機構かの論考は別稿に譲る。

4. 結語

本論考では、景観と風景を個別に定義するのではなく、人間の目の前に現れる(正確には脳内に生じる)現象の体験である環境の眺めを、景観と風景の関係を包括的に景観-風景系としてとらえる枠組みを提案する初期段階として、各概念の既往の定義の整理を語源的な考察を通して試みた。今後は、環境の中に置かれた人間が体験する現象の中で景観が風景に変容して受容される(風景化する)状態に着目し、景観の形成(formation)から風景の生成(generation)に至る脈絡の考察を試みたい。工学的立場から環境の状態を計画し設計して改変する場合、人間による認識との関わり方に着目することは、改変行為がもたらす意味や影響を理解することにつながると考えている。

参考文献

- 1) Norberg-Schulz, Christian, Intentions in Architecture, M.I.T Press, 1965
- 2) Norberg-Schulz, Christian, Existence, Space and Architecture, Praeger Publishers, 1971
- 3) Kent C. Bloomer & Charles W. Moore, Body, Memory, Architecture, Yale University Press, 1977
- 4) Jacobs, Maarten, The Production of Mindscape, Doctor Dissertation at Weageningen University, 2006
- 5) 大室幹雄, 志賀重昂『日本風景論』精読, 岩波書店, 2003.
- 6) 『新編相模国風土記稿』: 江戸時代に編纂された相模国の地誌. 1841(天保 12)年成立, 全 126 巻.
- 7) Hoskins, W. G. The Making of the English Landscape, Leicester, 1955
- 8) Hoskins, W. G. English Landscapes, London: BBC, 1979
- 9) 若松司, 「風景」と「景観」の理論的検討と中上健治の「路地」解釈の一試論, 都市文化研究, 4 号, pp.56-72, 2004
- 10) 中村良夫, 最終講義録, 東京工業大学, 2002
- 11) 中村良夫, 風景学入門, 中公新書, 1982